

■ オープニングセッション ■



開会挨拶

武田 信照



趣旨説明

加々美 光行

司 会

山本 一巳

.....
2006年11月23日

●司会（山本一巳） — ただいまより愛知大学 21 世紀COEプログラム国際中国学研究センター、国際シンポジウム「現代中国学の課題と展望」を開催します。はじめに主催者を代表いたしまして、愛知大学学長、武田信照よりごあいさつ申し上げます。

◆開会挨拶◆

武田 信照
〈愛知大学学長〉

開会に先立ち大学を代表して、ひと言ごあいさつを申し上げたいと思います。

本日より4日間にわたって、国際中国学研究センターによる国際シンポジウムが、「現代中国学の課題と展望」をテーマとして開催されます。この国際中国学研究センターによる国際シンポジウムは4回目になります。昨年は中国の天津と北京において、南開大学と中国人民大学のご協力により開催されました。本年は再び学内に戻って開催されるわけですが、明日、明後日は、学外の中日パレスで開催され、最終日に再びこのコンベンションホールで総合的な取りまとめがおこなわれることになっています。

この国際シンポジウムのために、国内外から50名に近い研究者の方々に学外からご参加いただきました。ご報告あるいは討論をいただくわけですが、学外からご参加いただいた方々に大学を代表して厚くお礼を申し上げたいと思います。と同時に、このシンポジウムにご参加いただきました会場の方々にも厚くお礼を申し上げたいと思います。

現在、中国は国際社会のなかで、その存在感を高めてきています。経済成長は引き続き高い比率で実現をしていますし、中国企業の海外進出も盛んです。こうした経済状況を反映して国際政治の面でも、ことにアジアの国際政治の面で、極めて大きな役割と責任を果たしつつあるといえるかと思えます。そのような中国の状況、かつての古い比喻を用いるとすれば、「眠れる獅子が目覚めた獅子になってきた」といえるのではないかと思います。しかしその反面、例えば沿海部と内陸部との格差、あるいは三農問題といわれるような農村問題、環境問題の深刻化、また上層部におよぶような汚職の問題等々、内部に抱えるさまざまな問題を生み出しつつあるのも事実であろうと思います。このような中国の現状と今後、これをどのような視座でどのように把握し、かつどのように評価していくのか、現代中国学に課せられた大きな課題ではないかと思います。このシンポジウムが現代中国学確立のための大きな役割を果たすことを期待します。

この国際中国学研究センター、これは文部科学省の21世紀COEプログラムに採択され、さまざまな財政的な支援を受けながら、研究・人材養成の面で諸事業を展開してきているところです。しかし、これは一応5年間です。今年がその5年目、いわばこの21世紀COEプログラムとしては最後の年になるわけです。この国際シンポジウムも、その意味では締めの役割を果たすシンポジウムです。ただ、この21世紀COEプログラムは、それぞれの事業を評価したうえで、採択数を絞って、さらにまた支援額を増加させて、グローバルCOEというかたちで継

続するという国の方針です。われわれとしては、この国際中国学研究センターの諸事業をグローバルCOEにつなげていくように努力をしたいと考えています。その意味で、皆さま方のさまざまなご支援をいただければ幸いです。

どうもご清聴いただきありがとうございました。



●司会— それでは早速今回の国際シンポジウムの趣旨説明へ移らせていただきたいと思います。なお、本日の司会は、本COEプログラムの事務局長をしております、私、愛知大学の現代中国学部の山本一巳が務めさせていただきます。よろしくお願いします。

では、本学、国際中国学研究センター所長で、本COEプログラムの拠点リーダーであります現代中国学部教授加々美光行より本シンポジウムの趣旨を説明させていただきます。

◆趣旨説明◆

加々美 光行

〈愛知大学／COE拠点リーダー〉

おはようございます。まだ5年経っていませんが、4年と7、8カ月の間、COEをずっとやってきました。今年が最終年度にあたります。第一期COEの期限は5年ですから、来年の3月末で、このプロジェクト第一期目が終了します。ずいぶん長い道のりをやってきたという思いがします。その意味では今日は非常にうれしくて、心のなかは、半分は心配ですが半分は晴れ晴れとしています。この山を一つ越えれば、また次の山がくるかもしれませんが、取りあえず少し頂上が見えるという気持ちでいっぱいです。

2002年に、文部科学省のCOEプログラムの認可を受けてスタートした際、ちょうどイラク戦争が始まる年でした。2001年の9・11、ニューヨーク世界貿易センターが民間飛行機の自爆テロによって爆破されました。ご存じのように、翌年、ついに先制攻撃論に基づくアメリカのイラク戦争への道が出発します。そうした緊張に満ちたなかで、このCOEはスタートしました。

もちろん中国学ということを経験としてスタートしているわけですが、中国学はご存じのように、過去、地域研究（エリアスタディ）と呼ばれた分野のなかの代表選手でした。これは戦後、フェアバンク（John K. Fairbank）、ドン・マッケイ（Don McKey）などのハーバードグループがアメリカでエリアスタディという学問分野を立ち上げて以来、フェアバンクはご存じのように中国学の大御所でもありますので、当然、地域研究のなかでは中国研究、中国学というものが中心的な位置を占めてきたわけです。

私は、愛知大学に1991年に赴任しましたが、それまでの24年間はアジア経済研究所で地域